

所沢市史講座 「谷戸のある生活」所沢の魅力、再発見②

2023-10-01 記 小川雅愛

■実施日：2023-09-28(木) 13:00～15:00 ■参加者：29名

■会場：中央公民館 学習室1・2号室

■講師：文化財保護全国協議会会員、市民大学29期指導講師、

ところざわ倶楽部特別会員

門内 政広先生

■テキスト：A3判図解資料（資料1～資料8）講義用

昨年度の11月開催 同講座①の際の参加者は28名であった。今回も再び猛暑の中会員の約7割29名の多くの会員に参加いただき、予定した席が足りないぐらいの盛況の開催となった。

講師門内先生の熱意のある語りと明快な解説、現代の生活の身近な比喻を用いたわかりやすい説明や謎解きクイズも挟んで講座予定時間90分があっという間に過ぎ、2回の今回で終了予定の講座は後半部分が積み残しになった。ありがたいことに先生のご厚意により改めて後半部分弥生時代以降の講座を次年度も引き続き行えるような運びとなり、多くの方が切望していた講座が最後まで完遂できる喜びを感じている。



A3判8ページ資料やプロジェクター映像でみる所沢の魅力、再発見講座は古代史を好きになるきっかけになると思える。魅了されたばかりでなく思い違いを反省して再認識したのは私だけではなかったかと思う。29期他奇数期の市民大学修了生はこの講座は履修済みなので目新しくはないかと思うが当会の講座記録としてその展開を述べたい。

1. 資料1 「谷戸のある生活」の基礎資料篇

先生の所沢の遺跡とのかかわりは約30年前の砂川遺跡の保存に関する遺跡範囲の確認調査を担当されたことが契機となったように聞く。

◆最初に遺跡を考える考古学は古気候学や地形学、地理学、地学の知識が必要になる。武蔵野台地の地形の変遷では海進（温暖期）、海退（寒冷期、氷期）が繰り返され、現代見るような地層や地形が形成された。とりわけ2万年前の氷期、6000年前の縄文海進が遺跡の理解に欠かせない。現代は地球史では氷期と氷期の境目にあり、間氷期（気候は比較的温暖期である）と位置付けられる。二酸化炭素排出による温暖化は地球史に拘わらず進んでいるようだ。

狭山丘陵は関東山地から流れる多摩川水系による広大な扇状地に浮かぶ独立した丘陵であり、元々は多摩丘陵と一体化したものであったという。

狭山丘陵の南面では河岸段丘の形成が顕著、これは以前、所沢高校の地学の先生と当会の活動

として企画したフィールドワークで周辺を歩いた時、段丘の形成する地層を説明いただき、地質や土壌の顕微鏡観察をした記憶がよみがえる。火山灰では丹沢系に混ざって鹿児島島の始良カルデラのものもみられる。ちなみに下末吉面は神奈川県にある地層から命名された。

◆古代の生活とのかかわりでは、狭山丘陵周辺に見られる急斜面で湧水の見られる急斜面のハケ、安松にある赤バツケなどハケの地形が重要であるとのこと。狭山丘陵の谷戸をつくる丘陵には多くの遺跡が集中した。川のほとり、水辺が最も生活環境として優れていたからである。

狭山丘陵を水源とする3つの小河川 砂川、不老川、空堀川は川に拘わらず不自然な名前、これは季節により涸川（ワジ）になることがあり、その状態をもとにした珍しい川名となった。

2. 資料2 後期旧石器時代の所沢に砂川遺跡あり！

◆土地の中のような 現代の生活圏＝黒褐色の表土（攪乱土）の下は暗褐色の腐植土の層、凡そ1メートルで縄文時代の生活圏になる。その下黄色い層を3メートル掘ると旧石器時代の生活圏になる。これを地層累重の法則として知られている。日常生活で新聞を読み終わったものから重ねていくような例えで説明をうけた。遺跡の発掘調査では旧石器が狙いであるといっていきなり深く掘り下げない。現代、縄文面へと調査完了してから、旧石器の層を調査していくのが基本である。

◆地層の累重を受け、一定の年代を決定する指標となる示準石器として技術の進歩をみせる格好の遺跡は36000年前～15000年前へと長いスパンで見られる三ヶ島のお伊勢山遺跡である。

◆砂川遺跡で推定されることは石器の出土地が3つの塊であり、さらにそれぞれが3か所に分かれていることから竪穴ではなく簡易型テント状のもとで暮らし作業したことがうかがわれる。フランスの同時代旧石器時代のパンスバン遺跡の追跡調査からも類推できるという。

◆砂川遺跡では長い間解明されなかった石器作りの作業と遺跡間の移動がわかり、日本の旧石器時代の研究の基礎となったことである。例として茶碗を床に落として粉々になったものをもとに復元させるような、気の遠くなるような復元作業の未解明された。黒耀石の外側部分（石器）、またもう一つは中心部のみの石核があり、前者は原石の中心になるものがどこにもなく石器は他の遺跡に搬出されたこと、後者では他の遺跡で石器をすでにはがしたものが持ち込まれたことがわかったことで、この遺跡で初めてこうした事実が確認された。またナイフ形石器の制作工程がわかったことなどから砂川遺跡出土の石器は国の重要文化財指定となっている。

◆旧石器時代の生活はどうだったのか 槍と弓矢を持ち上半身裸の集団での狩のカット図を用いて間違い探し2点を指摘いただいた。この時代には弓矢の使用はどの遺跡からも発見されていないので間違い。裸の絵は寒冷期であって、ヨーロッパの絵のように動物の毛皮を巻き付けた姿が正しいだろうと。

3. 資料3 縄文時代の遺跡代表―西上遺跡、高峰遺跡

◆15000年前から始まった温暖化は採集・漁猟（河川・海・湖）・狩猟による豊富な食糧の確保や保存が可能となり、旧石器時代では痕跡のない定住生活(12000年前ごろより顕著)を見ることができるようになった。狭山丘陵の谷戸に集中する遺跡は数えきれないほどの分布を示す。

◆東所沢和田の5500年～4500年前の縄文中期の西上遺跡では1000年間の間に少しの住居移

動を6度にわたって繰り返した形跡があるので、よほど住みやすい環境であったことがうかがえる。発掘は一部であるが広場や墓場を真ん中に丸く囲んだ集落であった可能性がある。

◆北野天神のバス停の一つ先高峰バス停の近辺に高峰遺跡がある。森の中に開けた丸い形の集落の想像図がある。ここでは死者を葬った大型縄文土器が発見された。なおこの時代になって弓矢を用いたことが証明されている。



◆縄文時代は縄文や土器の形状により早期から晩期迄5段階に分けて区分されている。これに草創期を加えることもある。遺跡数では5000年～4000年前の中期が最も多い。加曽利貝塚でもこの時期に独自の土器を使用していた。

4. 資料4 縄文時代は海辺も谷戸、里山も豊かな社会？

◆寒冷期の旧石器時代に比べ、山野、海辺の豊富な食料資源、狩猟の道具の進化等による効率的な食糧確保をしていた様子が「縄文人の食生活カレンダーと道具」の図解でよくわかる。漁網や釣り針の使用は驚き。

◆特に南関東では関東ローム層による土壌は酸性度が高く、動物や人骨はよほどの幸運がない限り残らない。貝から発生したカルシウムの作用する貝塚では動物や人骨が保存されることが多い。神奈川県横須賀市の夏島貝塚の貝層出土の動物遺存体の図解を見る限り、多彩な食料を得ていたことがわかる。ほかの千葉県の貝塚で見える限りタンパク質摂取割合では植物・草食動物・魚介類はほぼ均等の各30%位、但しカロリー計算になると植物由来が80%近くになる。安定的な食料はやはり植物で、木の実のクリ、ドングリ、クルミなどの三択からクイズ、どれが一番多用

されたかであったが正解はクリで、栽培と保存に優れ栄養価が一番であったからであろう。三内丸山遺跡ではクリを栽培していた痕跡すらあるという。

◆ イヌは弓矢による狩に欠かせないので大事にしていた。「5匹のイヌが猪を追い立て、弓で射る」狩猟絵図、「3匹のイヌを互い違いに丁寧に埋葬した」イヌの埋葬図、そのうちの1匹のイヌは骨折していたのに形通りに埋葬されていた。

◆ 道具に欠かせない黒耀石は火山国日本ならではの必須アイテムであった。火山の乏しいヨーロッパの石器は固い頁岩などを利用していた。南関東で得ていた原石は信濃エリア、伊豆・箱根エリア、群馬・栃木エリア、伊豆諸島の神津島の4か所である。盛んな人・モノの移動が一か所の遺跡から複数の産地の黒耀石がみられる因であると思われる。TVで「海の縄文人」というタイトルで、縄文人は丸木船で盛んに航海し装飾貝や黒耀石を入手した旨の番組があったことを思い出す。

◆ では一体黒耀石はどんなところで採掘したのか？ 黒耀石は名前の通り火山の溶岩が急速に冷却されたガラス質の副産物で表面がキラキラ、星のように見えることから長野県の出土地を星糞峠という名がつくところがある。27万年前に噴火した火山の下その峠から黒耀石が流れ下った一帯が産地 「鷹山遺跡」の黒耀石採石場であった。旧石器時代人は地面を掘り、または鷹山川の転がっている黒耀石を採石し尽くしたようである。縄文時代人は採石場で地面にわずかに露頭をのぞかせている黒耀石層を手掛かりに掘り出し、入手したことがわかっている。次回へ

5. その他

◆ 遺跡の名前は発掘された当時の地区名（小字名）が付けられている。

例：芸術総合高校（旧緑が丘高校）のそばの日向遺跡は発掘時の日向で、いかにも南面で日向（ひなた）であり、縄文でも好まれそうな場所である。高峰遺跡（現在は小手指南）など

◆ 考古学年代の遺跡調査では文字も言語もなくモノでは石器以外は残らないことがあるにも拘わらず当時の社会・生活の様子、食糧、移動、家族構成、宗教祭礼など様々なことが日進月歩で解明されていることがわかる。昔は石器の暦年代や土器の文様の違いにみる年代の理解に重点がおかれ、古代史も暗記を主体に覚えようとした時代があったと思う。この講座を聞いて古代の謎解きや面白さは感じる。ただし、仮説を立てても証拠を見つけることは至難の業であろう。

◆ 歴史は得意ではないが古代から律令期にかけ、自分でも特に弱いと思い講談社「日本の歴史シリーズ」発刊を契機にこの部分を近所の書店に依頼し定期的に購入したことがあるが、その時起きたのが旧石器前期の発掘にからむ石器捏造事件であった。それですっかり熱が冷め、せっかく買ったがつん（積）どく（読）ままになった本を今回少し開いてみた。

■参考資料

◎所沢市 埋蔵文化財包蔵地（遺跡）分布マップ 発行 所沢市

◎日本の歴史 01 「縄文の生活誌」 講談社刊行記念特別定価本 2000年10月刊

◎「ところざわ歴史物語」増補改訂版 編集発行 所沢市教育委員会

◎「縄文人は海を越えたか？」水の江和同著 ◎旧跡時代の黒耀石の流通